京三中を憶う

三中38回　山下恵光

思いがけず母校から在校中の思い出など書くよう依頼をうけましたが、第二次大戦のさなかから終戦直後にかけての激動の中に日々を送った学生にとってはあまり語るような良い思いなどはありません。しかしそんな時代もあったと云う事を伝え置く役目があるかもしれないと思い、重い筆を取ることにしました。

学区制と云う制度の中で自分で学校を選ぶ事も出来ず受験し、通う事になった学校ですから気の乗らない出発であったといえます。

学ぶと云う事には後で気がついた事ですが、人と人の出会いが教師は勿論のこと学友も如何に大切かと云う事を感じさせられました。

戦時下のことで勤労奉仕と称する農家の手伝いや果ては防空壕掘りにも狩り出されると云う事も度重なるようになりまし

た。その頃の思い出の中に夜行軍で奈良の東大寺まで四十キロ程を学生服にゲイトル巻いて歩いた事を覚えています。食糧難で体力の充分でない時の強行軍でしたので或達成感は印象に残りました。

ところが学校はとうとう戦況の悪化から勤労動員ということになり、遠く愛知県半田市で軍需工場へ連れて行かれました。ここでもまた色々の事を体験する事になったのは云うまでもありません。海軍の偵察機を作っていたので、最初は子供心としても興味はありましたが、ここで何より悲しい出来事がありました。それは昭和十九年十二月に名古屋を中心に起こった東海大地震でレンガ造りの工場が潰れて、一年上級生が十三名亡くなると云う事が起こったのには身も心も打ちひしがれる思いでした。

教科書を全く手にしない学生生活が続くと、これで良いのかなと云う疑問が何時か云い知れぬ焦りに変わって行きました。こんな時代だから勉強しようと思ったら軍隊の学校へ行かないと無理だと担任の教師に言われましたが、しかし、自分には家業があってとても職業軍人など無理と思っていたのです。この思いは長く心の葛藤として続きましたが、或る時ふとした事から発想が変わり、軍需工場で職工をしている事だけが家業に繋がるとは云えないし、今を抜け出すには何とかしなければなら

ない、と言う考えになりました。

それが軍人の道を選ぶことになり、今にして考えるともう無我夢中でした。唯試験日が近いと云う理由だけで海軍兵学校と云う事になりました。

しかし、入学試験と言われても、殆ど授業らしき事は一年生の時だけと云う者にとっては自信もなく手のつけようがありませんでした。ところが、受験の日々に偶々本校在校中の先輩に会い思いがけないアドバイスを貰いました。と云うのは軍隊の学校は受験学科の成績よりも受験態度にあると教えられ、何よりも元気よく、姿勢良く、声も大きくと言う注意を戴きました。是には後から思い当たることが色々ありました。

それよりも、この受験で見た江田島の本校の環境の良さ、校舎など設備の美しさには感動しました。母校と比べて教育とはこんな所が必要なのだと痛感させられました。それに、君達が入って来た門は正門ではない、正門は海に向いている桟橋だと聞いて二度びっくり、当然の事であっても自分の今の暮らしとの落差の大きさを感じさせられました。

そんな事で始まった海軍将校養成の学校生活も長くは続きませんでした。終戦になり家に戻るという事になりましたが、何も手に付かない日々が続きました。

兎に角もとの中学校へ復学ということになり、調子がでずに

過ごしていたが、考えた末に若しも父の住職する光悦寺の後を継ぐという事になると父も堆朱彫りの趣味を生涯持っていたので、私も光悦翁に肖ってその道を選ぶこととしたのです。

急遽決めた方針だが幸いにも子供の頃から絵は得意であったので、受験した美術学校に合格する事が出来て母校へ報告にいったら、教師は「ふうん、それで行くのかい。」と唯それだけでした。

考えて見ると、教師にしてみたら京三中は進学校という考えしかなくて三高、京大を目指すのが普通で、美術学校など祝福できないとんでもない異端者とみたのでしょう。それ以来母校へも同窓会にも一度も顔を出したことはありませんでした。こんな雑文を書くのも筆が重いと申したのもそんなことからです。お許し下さい。

さてそんな私にも今年思いがけないことが起こったのです。それは一緒に暮らしている孫が山城高に入学したのです。それも私には考えられない陸上をやっています。こうなると恥を忍んで六十年振りにまた校門を潜る機会もあるかも知れない。これも人生の奇妙な出会いでありましょう。（乙酉　秋）